令和5年度　愛知県家庭科研究会　総会

令和５年５月１０日、名古屋市博物館講堂において、令和５年度愛知県家庭科研究会総会が開催され １１１名が参加しました。

講演は、「子どもたちの未来のためにブラザーが担うミッション」と題し、ブラザー販売株式会社　代表取締役社長　安井　宏一様にご講演いただきました。

１　会社概要

２　ミシンの歴史、近年のニーズ

(1) ミシンの歴史

万延元年（1860 年）日本から初めてアメリカに渡った国の際、日本の近代化を夢見て持ち帰った機械の１つがミシンであった。ミシンは次第に日本中に広まっていき、その後アメリカ製のみならずドイツやイギリスからもミシンが輸入され、洋服や帽子が作られるようになり、ミシンは欠かせないもとして普及していった。英語で「machine」（マシン）と発音するのが日本人には（ミシン）と聞こえ定着したと言われている。繊維産業が盛んだった名古屋でもミシンは普及したが、故障した際に部品がなかったり修理する人がおらず、手先の器用な職人が部品を手直ししていた。そんな職人の一人であった安井兼吉はブラザー工業株式会社の前身、安井ミシン商会を設立した。長男の正義は、幼い頃からミシンの修理を手伝ううちに国産ミシンを作って世界へ輸出する夢を抱くようになっていた。兼吉の死去により安井ミシン商会は息子の正義が継承し「安井ミシン兄弟商会」と改称して、兄弟で協力して国産ミシンの開発に着手した。昭和 20 年名古屋大空襲で多大な損害を受けた後も、再び家庭用ミシンの製造を開始し、世界へ輸出を開始した。その後タイプライターなど様々な分野において、ミシン製造で培ったブラザーの技術は今も全世界で活躍している。

(2) 近年のニーズ

コロナ禍にマスクがなかったことや巣ごもり需要で、手作りをするためにミシンを購入する人が一気に増えた。それに伴い、自分だけのものをカスタマイズする風潮が広がった。ハンドメイドマーケット（minne）では 10 代の作家が増え、また、ブラザーが使わなくなったミシンを提供し、捨てられてしまう服を作り変えるサステナブルファッションコミュニティの場（ニューメイクラボ）には 20 代の若い世代が多く集まっている。ミシン＝「縫う道具」であった機能的価値観から、自分のやりたい事・やれる事を実現できる文化的価値観へと変化している。

３　アパレル産業と環境問題

大量生産大量消費による CO_2 の排出により環境負荷は大きくなっている。服が再資源化される割合は５％程で、ほとんどはそのまま焼却・埋め立て処分されている。服が安価に手に入るようになったことで、衣服のライフサイクルの短期化による大量廃棄が懸念されている。

４　ブラザーが考える未来への貢献

ブラザーは「At your side」のコーポレートメッセージを掲げ、従業員が"一丸となって優れた価値を創造し迅速に提供することで持続可能な社会の実現を目指している。

① 福島の障害者支援施設「しんせい」への寄贈・技術講習会などの支援
② 使用済みトナーの回収や環境配慮製品の販売
③ 国内外での環境保全活動（植林活動「ブラザーの森　郡上」や大学と共同で緑化推進のための調査研究）
④ ガーメントプリンティングによる大量廃棄リスクの低減
⑤ コンタミボディをはじめとするアパレル産業の課題解決に向けたプロジェクト
⑥ 「NewMake Labo（ニューメイクラボ)」との協業
⑦ 「100 My Liccca」楽しみながら環境問題に目を向けるきっかけに
⑧ 消防グッズのアップサイクルによる「防災意識の啓蒙」活動

子どもたちに向けた、様々な取り組みとして

① ヴァレイソーイングジャムによる「子ども洋裁教室」
② 経済産業省「こどもデー」でのミシン講習会
③ 日本縫製機械工業会主催「小・中・高校生作品コンクール」
④ 岩手県滝沢市と連携し地域愛醸成に取り組んだ「まちづくりキット」

など、親子で一緒に楽しんで学ぶ場の提供を行っている。

最後に、ブラザーは「未来を担う子どもたちのために」いろんなことをしている会社として、これからも継続して社会的責任を果たしていきたい、とおっしゃっていました。